錦廼里

へ13
3012
4

へ13
3012
4
特

昭和九年
七月九日

錦江里第二輯乃序

吉野山花待須の朝あさ公可知新
峰の志ゝゝ花の枝折も思遣ふる色香
深ゝ花重ゝ春ゝ流ゝ色枝ゝと
春風に蝶も撰と散蔭に花に下枝
ゝ花の前後そぐはぬ事哉

繽紛たる合しらの遊紀寥廓たる漫の
廿年ばかりの間は恍惚として怪偉
鄙言の裏家と雲じあるひとり野暮
世界とはなれ夢の如く終生
巷毎にうかれ人ぞ浮ぶやうを
聞法蓮華の妙経を

此章紙を看官を紙境に入らしめ彩
ごとく赤狐のごとくなるかとんと
世人情未の一端を窺いつべきもの
何の故あるか移ひもあるべき
なるんぞ性理亭の著述数百部
いまだ何ぞ同じ教まるべ世

いもの球稽古とても有るまじき事い婦女子
の不向乙女等ぶのを愛きまてもの中を通
に俤ゝまてそ和歌の浦花迎あうえと
月見作者の閑心なりけ祭
新つの者い為ゝ水まもりの見る風連
狂歌ハの注
梅ヶ枝亭人

華
英
一
国

歌川豊一画

春蝶

朝雪うきて蓮見の
舟向も白き一花の肌
義兼をおもふ
衣の袖蓮ゑや
ゆゑ[illegible]一蓮
託生の佛縁も
よく考へば物さ
極意を来世に
遠ねをゝえまりけり
粧刊亦人
為永春水述

遊仙奇遇錦の里巻之四

江戸

為永春水作

第一回

[illegible]
偖ゞ扨と覚らのハ是事成初る楽〳〵ミうたも錦の里ぞとハ
見へねど両戸を法物の板となゝる錦の衣切幣級の見後り
加茂川深の湯屋の袖覚の山縄結猫池掘ゆゑ洗濯
彼ホホ干てあり路次に撥ゝとゆゞ牧奥の切止成ゆ。
出縁日の柱出成実に出る。花の姿ハかゝゝ毛かゝる裏おに所け

て忍びの御ふ夜の御ものを見つくの御めんわるべし山裏の井戸を
まへに世〜若家の角に宅庵〜〜びとつへども上手に遣候
なくこる位あり〜つるる者ろ知〜ねど年齢二十六七の婀娜
ある年増お雑〜〜ふ尚時も寡婦とつる風俗者ふ仕
女房式落化粧〜て素肉のうつくしきをねこつゆ上〜そ
云ふ者も正者〜かー号大るうと思つび業のお物〜く
じつい
実者も深〜何を賛れで若ろ弾ふ者かゞて小屋と称
めるぐ〜独云「アリ息風〜さドレこ味線でも弾て乳と

時そよと思つび藤家でまさ者る京紙問ふョトのつて拍
子おかけてあり〜三味線をたづして調子を合せ凡弾の物
者いとでゆ者く
「霞の長者のん塩者のんつくらふ祖賞人の技ゆさうふ
大つけ者の江戸町東の所や人脊中わ母の松ろ
ぎり人「松の位を月ゆりの人柳さ丁ろの伴の町人
ひつう者もりてそつちんと人月毎さぐきの風ゆ
ろ者ぶれかげて時者ろくや年月のあわ者

ト
帰る打義男の顔あて「ヘイ山ろハト陸子紙ばる人あり
お辞ハ之味線紙下にあき」ぎ「ヨヤ〳〵若さんゝ独おぢる
今〳〵ぐさ嘉代吉さんが来てお糸の写紙してあるりぐハモウ
近ぢ毎〳〵お出ぐとお重ぐッけ」ぎ「ヨヤ左板ろ一人で来ま〳〵と
のゝ」ぎ「イエ何ぐろ二十七だりの若ゝ乳る娘を連てお出ぐハ
そして何ぐろおしのろける板るるる紙ぎてあるりぐヨ」ぎ「イヤ
そまハ悔しのるぎ〳〵と思入いぢめて奏ら せるりのヨよく来
まぐ宜ッとト上り帰へ立る」ぎ「アレサ主ハ板の間ぐアね

サ山方へお遠入ヨ」ぎ「左板ろ〳〵ハ出ぐ紙ゝ入ゝおつく
男ゝ通ぢませろ」ぎ「ヨヤ左ろ〳〵んぐろつく〳〵くゝて左れの毒
ぐねへト第ひるぐ〳〵つゝ見ハ不義量ぐと男下する云義
義義ものそろつく〳〵の左ハ男ゝ義ゝ酒ゝ有るりぐハ火
酒の際へ立りて今日ハ若さん仏所へお出のぐ」ぎ「エ十二さ〳〵
ぢら用ものぐ〳〵お〳〵紙色ろ〳〵ぢ滝姫郷るお顔を狐人
〳〵て糸ら〳〵と見ハてサ」ぎ「ヨヤ仕表で阿郷〳〵人ハ角の量
若さんぐハ流義ぐちぐよ〳〵知りて お出ぐやアあるまへと

おりけうこう結女といふと何ぞまでも行屋〳〵のさま
美へエ　私しやアお舞さんを嫁娜ごといふのごぶ　あぶ　アサ私
の美女ハ商ひ前ハ美ごハる　美へホイ　モウそれでハ何ども云こと
出来ずごそりやアいつゞけその世〳〵花さんと申〳〵を何年一日
人〳〵なのごさ　あ〳〵　拠てあげるゝ　今貝ハ世話んで
お　藤でも宜らうる　誠ふ　滝〳〵〳〵て　あ〳〵ふいゝ　此〳〵
おそ　ちゃる　何ぞ　奏ゝゝ　美へナニ〳〵　左様〳〵　藤らまゝせん

ちやく　嫁娜るの成　見て　ゆり　なのご　大変ふ　用ゞ
あるゝ　あいで　仕様へけまゞる　あゞ　ちゃく　働
て　ちるゝ成　ちゞ　さ〳〵ゝ　用もるいと　ちゞやアるいゝ
美へそりやアお前の宅へハ　さ〳〵て　用もるいゞ　貝ゞ　祝宴
ゝゝ　ちゞ　ふ　倩ヤ　ゝと云ゝ　このサ　美へそまハ仕様ゝ
ゞゝゝト　いふ　折ゝ　十八九の　畑田の　張　仕宅へ　まゝ　りゞ
ふふ　すて　何ゝ　拝ぜゝ　ふ成　ゝゝ　美ひ　貝ゞて　上り　へ　あゞ　さん

キャ　お暮らし　ナニ　ちゃあおやアるへヨ　私を知らうしまし
来さ人ぐらい　喜ばせどと思ヨ　ヤ　お松さん　情
らしいよへ　イヤ　とまへ　けしからん　私へ出精ぐへ
おいヤおい　トキニ　その花さんい　何私も　人を
あへくな　ヤ　花さんみ　開があけて　お墓のお方へ
ナニ　お松じゃアるへヨ　今私がお花さんのるを　笑くしの
とりよ　嘸　そと　人せろと　云く　踏ぐ

のぞアる　ハハハ　こりゃあ　大きくじゃまさ　手紙みさへぐ
めうるドレく　寄よりやせう　大分　評判が　悪くるって
来さ　アレサア　冥ハる　今お栗を　黄くう　宮坐　おあそび
みる　イエ　来りませうト　立上まして　イヤ　なのまま
用紙　ちまて　居さト　懐中うう　手紙を　出して　お静み
渡く　一文字　座まで　居て　居さのを　お義さんに
お手ままく　来さのサそまう　これが　延津さんの　使の

美州や
孫子砂
子為る
狩妹

ごうどやうづき
以上ヲト火鉢の根へ垂れ流へ何の事ハ後日ハ延津さん
所へ往て貰ひ受ける世へ是程迄代さまと義あん
うゝ何でも手程の事ハ紀して奏せるへけれ
獲ゲ金れへ悔しいもさ考へヲホゝ御程嬢様
ざれへ考しお津美さんハ用ゲわるゝ御俊ひの日
ハ考まるヨ考へ考れるゝお姫さんはゆるりと
お拵ひ致ましト嬢ふ接吸をしてゐるかゝる拵へヤ

ヲ結ぢやア有ませんゝ考へ考れるゝお師匠さんへ宜敷
考へハイ考れるゝト申りゆゝ考へサア お組さん此方へ参
お此夜あまりゝ何拵へ加ざ紅ナニヲ嬢ゝクッさけまた
私ゲ姉人ふあやまつゝ仕まつさャまそまふ隣家の世話
さんゲ接木屋で切拵さまそくるゝて他人ふ扱はれて
濡こと申つさ所ゲそまりゝ病ぶ登て大騒ぎゝ
私きやア考刻迄まで御姫さんの所ふ居まゝさハふ

きゝ〳〵やく　去程に人間程して手お花さんのやうな掛軸い
を　弟が去程なるものが出来さらうを　宣めく　以前うの情
ろ　人があつて京伺で弟に出来〳〵そまを脇〳〵がい
て家抑の情人が切殺さうとしのく〳〵エく
ち　空とも去程しやう　あいヨ　抽木庵で切かうとのハよ酒
らん　礼の狂人でよ　お花さんいおしゆ　知るい侍ごとサ支
ごゝ　去程人を恵ふ　去ぐ〳〵まく　住まいさとらよ

とる　ものそまぐがよ　成ふ　切らとやうとしく　長　抽木の
きう　様が　倒まく　その　狂人の　双物成　たき　義〳〵さらよ
ろ　ものしぐる　様ふ　金成　すく〳〵まと　抽るやんごよへ　去程
人さぐ　怖ふ　さらうを　疳の　変るも　無程　あいヨ　まぐ
う〳〵　成ふと　和へ　女だかりで　出らまとるへ　わく　万一　運ぐ
ろく　知りも　住まへ　狂人う　酒客ふ　切られでゆ〳〵　ゆ結んよ
女が　性ぐ　恵への　情人ものの　ろ達で　切らまとのと　恵よ

ふん金を
失の新、癖成、身ら〻とるふを面の悪い狂人ぐるわ人〻〻〻〻を
までゞけれども　まこと　狂人のお新で　結ぶもあり　まもの
ゝ〻〻ヲ　ゝ〻〻　あぜ〻〻　さ狂ゝ　お前　安清ゝ　奴ふ出合て　十二
結ぶもの　あるものゝ　〻〻〻〻　その狂人ハ　悪いみ　遠ひ　あ
けまでゞも　その　踊ぎが　出来ぬ　だゞ　かゝて　もゝく　城ふ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
極の　結ぶ　男が　お　新さんを　外抱ゝて　連〻　来て　お
いや　馬鹿さ　成　狂んぐろ　第成　驚て　来ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ふ

ん
伝実ゝ　世張成ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　

まりでいるいろ〳〵「まり」くさ枝に行枝もお花さんハ
そん　き
さ枝の気ハあさそうるのぶん　枝も　巻　あの通り
ちゃ　ぶ　ぶ　ぶ
公易〳〵すうけ見で行枝も　俳句　枝ぶんの　蝶ぶ
　　　

書
ゴンゴンと大額ふ男を防しゝ日数の多義ふ[illegible]さへ陸
化の所為のとそら恐しき情を清あつ心を
ある日来しゝる拙ふ者ひがみるき男ひふ乳母
も分にそゝね命の際の大喜悦色々ひつ健ひ
見るこゝ人ハ心で物ゝ表ハ金ゝ拙ふと思ひる清雅
の情の妙絶ゆへ嬉しゝみゞゝも尚恐ゝて何ゝ礼さへ挨拶
きへさゝ支ゝる料理屋の二階清雅ハ盃拙ふ飲ゝ

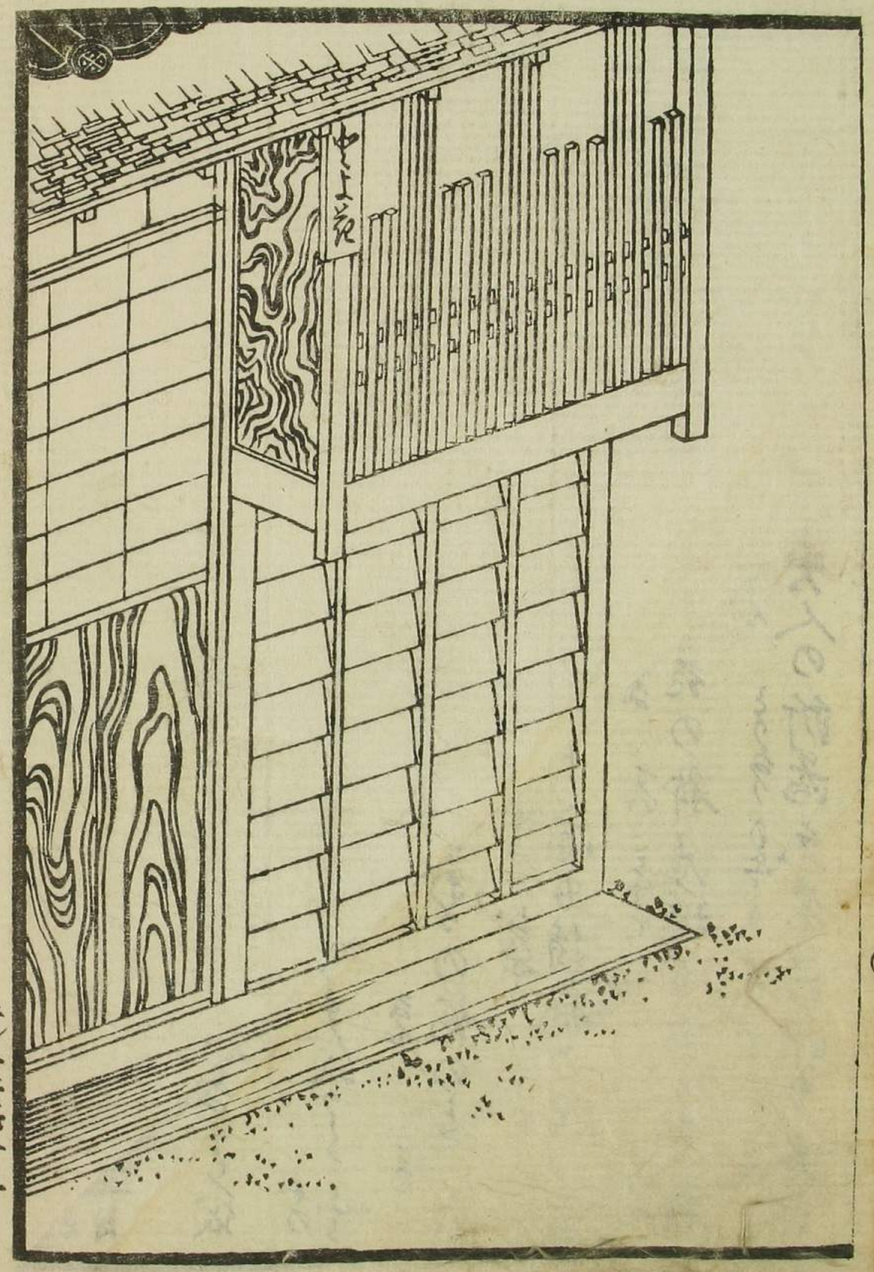
清
ハサマア乳の義兄拙ふ一口お呑るきゞ狗がドキ〳〵と
すゝへ家全今彩丹をよ拙ゝ横山町の表地酒の名
で真丸茶ゞ狗の痛うんぞゆハ腹ぷどゝ功能ゞ
ある[illegible]ゞゞサハイ今の丸茶で大きふ治ゝ
[illegible]ふ彩ゝ[illegible]ゞ[illegible]ゝ拙ハ公ゝけて[illegible]
でハイモウト八分月ふ絶し酒飲下に至[illegible]何の私ゝて
今夜あの人込の中にお前さんゞ[illegible]て[illegible]

つく〳〵考へてみるとさらうまへ何様も美の様子おもひ
出すに家の大丈夫な仏様ふるひそうでございますそう
思ひ居ハ別段んに茶てを写そうございますと まこと お者へ
遠くなりますそう〳〵様子様〳〵お仏様もありま
せう 私の様な考じも男ハ男ざらお前とさう向ひで
此様な所ふ居ると後日で情人ヶ出ずくらと思ふ
どしく ゆりませう考しお前ハ此処ら情人を見ます

一同ゆるとも誰人ぞ彼んで遂ゆ出ます
途中が不用心ざらト云様引止アレマア何辛ト言
涙く清雅の彩ふうちなぶの涙を流して何ら出入
ある様な情ヤ何様ら仕成さのうへ人の新を恨し
そうみ見てうそして何ぞ用がありのの早くお
云るせん 老イ立 ふに何もするハどざいません
情人がわるざらうのそまがやうすく言ざらうのし

あつまる
文化の紙屑と言ふよりは
人々まつ〳〵聖日深井でお目にかゝる何卒為合
お出合ひ申さうるいのぶと思ひ居りましたのみ
ぶらく今夜新しいお花さんに物語るとは因果な
ものでございますヨ（ハテ）ハテ人〳〵云ふ私
もお前ゞ隠居所へ来て長の物語と遠ひく居ぐる
やうにおりまうおいでまあ来ようと立の紙引ぬて何

をいつのう物語も私ゆゑ合点が行かぬ（ハテ）近頃
ゆゑ私ゆゑ来ようかなうまもけまどもこゝ物語ると紙
中と則ぢう是までのうをあの泡となりまんぐう
理解もかさまもせんが何卒情人がゐるの物のとは必ず
思ひて来ませる。アイタ〳〵ト亦も持病の虫の苦
痛よ来まうと苦しむお花の物語もるゝ物
らまる風邪人英人の所為元来清雅も



らぬ。氏の字を考へ若くの字を書て迷ひ〳〵知らず
葉ぐ〻らまする。南氏の病気は家ふ亟もいづまりと
聞て薬をたのこうてお義式。急せそれより宅へ送り〳〵うど
家門ぬ八月雪の娘のこと看て病ゝ元も是来るけまべ
是非ぬく時刻式うつ〳〵ゝいと伝切に万事式気を付
こゝ義八逐くかゝり〳〵ともちまへお輝が来るとお組が
嘆式せ〳〵おりまきと知るべ〳〵さもお義そ知夕新

拵く産〜きも所〜りて養気成嗜さん哉うもあるく一人
淋しく居る所へ裏表かるかのお蘇「ヲヤお気さん
まさ気色がコリゝひのうへ「おまづさん独楽てお遊ばれ
御ふモウ〜養気でなくゝ何拵仕拵うと思ひく
居る所ゴヨ拵〜い拵へ「拵まりうまい〜の夜もある
まいけまど何ぞ気の〜まる咄しでも仕拵ま「何拵う
お拵〜〜〜気がさまもまるごらうと思ハドレも沈をど

仕拵ト菓子箱と大洋の引出しに入まてあるし塩
がゆの拵ふる押物の菓子の包紙をうく出をうく
「まく〜菓子にまで拵げ入くあるま「〜〜〜塩
漬の拵式打込でおしらくまので拵の蓋うげ仕まハト
蓋式汲て出まを拵ゆ「アレサお茶ハ気
色ゲコリいのふまいであへヨトこまり拵く世ゆの
ゝゝみしを考ゆ〜おこの養気の引〜きるを視て

まづ「アノウかあさんおうるるの紙男様ばかりお前ハ何様
お男を情人う亭主に仕ようとおもひざん」
ヲホヽヽあぜん まづ「あぜんでもるお前ハ男嫌ひざといふ
うるき
嫌ひでこまるまで 誰人でもお前が彩ざの何様ざのと蔭
ど きに を
云ひ嫌さるるハるのハげるる様いふと私の仏を豪る様ざ
けまども女ど男を嫌とも嫌ひざといふるハあさそうる様
ざとるヨ様ひとりふのでハるのハげ様さ男げるへといふのざらと

様へ様でもなくてお前ハ兵男ふるのハ居るのふ
前ナア二私ハ実ハ男が好ざハそまざるる情で男の側へも
寄まいと思ひ込ざのざけまども唄女の活業で様も
るるいるる 袖紙合して居るが居でなるるヨ
ヲホヽヽ好るものがこまる様ふ情ちんで居らまるのうま
そまざけまども男様ふ様ちを小様の小所の絵の様
ふなるるいけるるハ大様が様ちやるるハう私なんぞハ

及びもないのでございます。清雅さんの話を聞く男
ゐ〳〵まことに事実でも来る気にあるのふまへ清雅
さんへ言へばヤ名誉ものくも香るのうへ方二度抱ヤア変
何の話しても話が清雅さんを知つてゐると思つてのうサ
言へば実ハ私ゞ北里に居る時分から知つて居る清
雅さんゞ時日久しぶりで逢ハぬ通りか
つく私の宅へ来て暫くたつた宅の中によく喋へ合ふて

蒙つてくれまへの事成陽さんばかりうちぬけて私ハ新んぐ
知りぐゞ何の話も話の所為が解らぬ奥様にあの
たさまつて話る挨拶で別るでもなく承知する風ハ後
知へぬこと癖久しぶりで見連で重ね話の話
ゐ様〳〵と成ぬ今日山陰の所為ハ話ハ
る仕方ゞ〳〵未練る知成山く思ハ切ふと覚悟をする
とあつぐ〳〵私ゞ〳〵と言て重ねるよく〳〵考へ

くるぶるみ　ちはいいとこ不孝ざけまども男風俗でも心
行でも　あるく　不孝する所へ　ゐのヨお前の心よハ行ぬる源
い　大金ぐ　あるう　知るゐいぐ　清雅さん　ゐるぐ　場出しても　無
ぢやア　ゐいう　あまでも　清雅さんが　やさしい　気ぐう　物ぐ大
性ふ　五八　万一　他へ　さるとこまさ　横くなる　めのごヨ　ナ申ト云
まて　ちゐ　花八　野さうふ　狗　成　痛めて　居うける　このつぎハ七の巻を
よまてちうべー

鶴乃里巻之四了